

THE INTERNATIONAL GRAPHIC

国内残存数の少ない稀観誌

【国際写真情報】とは

1922年から1968年まで国際写真情報社より刊行された写真報道誌。

国際関係、政治、皇室、産業、社会問題、教育、建築、芸術、医学、宗教、旅行、

芸能、スポーツ、科学、ファッショント、娛樂、暮らし等幅広い分野を網羅。

英文対訳記事も多数（中文対訳 1938年～1945年）あり。



本書を推薦します（敬称略）

姪田光義

中央大学名誉教授
中国現代史

『国際写真情報』の電子書籍版の発刊（戦前部分）を寿ぎ推奨する！

(一) 『国際写真情報』（以下、本誌と略す）の第23巻（1944年）「大東亜戦争画報」を見て驚いた。それは私が小学校1年生のころ、夢中で見ていた雑誌だったのだ。高波を蹴立てて突き進む軍艦群、勇壮に飛び立つ荒鷺航空隊、「海軍の戦闘絵図」、それに日本支配下の大東亜共栄圏のアジアの人々の笑顔、さらには訳も分からずに拾い読みした東条英機首相の年頭演説等々。軍國少年への道をまっすぐに走り始めていた少年だ、興奮し感激しないわけがない。

しかし今、これを見てすぐに連想したのは、あの有名なドイツ大統領ヴァイツェンカーハーのドイツ敗戦40周年での「後になって過去を変えたり、起こらなかつたことにするわけにはまいりません。過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります」という演説だった。歴史事実の欠乏と歴史認識の低落が主張される現今、本誌眺めなおし読み直して、過去の歴史に思いを馳せる。

(二) 本誌は1922年に発刊されたのであるが、それが普及される前に、まるで予見していたかのように翌年、関東大震災に遭遇し、悲惨な被災状況だけなく甘粕大尉事件とその時に虐殺された大杉栄夫妻の写真が掲載されていて（朝鮮人大量虐殺は隠されているが）、あらためて天災とその後の人災を恰も今日のコロナ騒動で右往左往する世相と重ね合わせて思い起こされる。その後、日本は戦争への道をひた走り日中全面戦争から太平洋戦争へと突入することになるが、写真は軍隊の雄姿だけでなく、戦時下の一般民衆の姿、生きざまをも活写し、その他方で日本統治下の中国は満州・華北・上海、そして朝鮮・台湾・東南アジアなど、いわゆる「大東亜共栄圏」の民族の生活や風習が日本賛美・支援として紹介されている。それは戦争末期（1944年）特集「大東亜戦争画報」、今日では敗戦として知られている幾多の海戦を紹介した「海軍の戦闘絵図」でさえ、有名な東条英機首相の年頭演説に親られるように「大東亜共栄圏・王道樂土」の建設を強調宣伝するものではあるが、その状況下で民衆の苦難の姿をも、何気なく写し出しているのである。

(三) 私たち歴史研究者は、「資料」を詳細に検討して歴史書を書くが、その資料はほとんどが文字であり当時の権力者が書き残したものであるから、当然そこには作為（権力への忖度）が働く。他方、写真や絵図もまた作為の下で残されたものではあるが、しかし写真の「怖い」ところは、作者や撮影者が意図しないうちに、当時の人々の生きざま、喜怒哀楽の表情などを活写し後世に伝えているのである。このことを念頭に置きつつ、歴史認識の形成のために本誌の写真をじっくりとご覧くださいよう、多くの現今の読者に推薦するものである。



本書を推薦します（敬称略）

井上祐子

公益財団法人政治経済研究所主任研究員・視覚メディア史研究
中央大学名譽教授

グラフ雑誌研究・メディア史研究にとって画期的なものであり、大きな朗報

1920年代は大衆社会化が進んだ時代であり、映画やポスター、ラジオやレコードなど、人々の目や耳に訴えかけるメディアが発達した。写真文化もその中に花開いた。写真の芸術性が追求されるとともに、グラフ雑誌や写真ニュースなどの写真印刷物が情報伝達の一角を担うようになった。

『国際写真情報』は、この「情報を見る新しい時代を牽引するグラフ雑誌の一つとして、1922年（大正11年）8月に創刊された。同年には『国際画報』（大正通信社）が、翌1923年には『アサヒグラフ』（朝日新聞社）や『週刊写真報知』（報知新聞社）が登場し、しきのぎを削りながら、発展していく。

アジア・太平洋戦争末期の空襲による社屋と印刷所の焼失、敗戦後の物資不足などにより、約6年の休刊を余儀なくされたが、『国際写真情報』は創刊から1968年に幕を閉じるまで、40年以上にわたり、内外のさまざまな情報を読者に伝え続けた。同誌は世界各国の人々の生活・文化・娛樂・科学・産業・災害・事件などの情報を取り上げ、その主な原因の一つが、資料へのアクセスの悪さである。復刻版の刊行は一部の有名雑誌にほぼ限られており、現物の入手閲覧が困難なものも少なくない。資料のデジタル化は、グラフ雑誌研究にとって喫緊の最重要課題である。

この度の『国際写真情報』の電子書籍化は、グラフ雑誌研究・メディア史研究にとって画期的なものであり、大きな朗報である。さらにまた、社会学や美学など多様な分野の研究にも有用であると思われる。多くの研究者・読者に利用されることを願つてやまない。

森暢平 時代の雰囲気を理解するためにグラフ誌の存在は欠かせない

本年は中国共産党成立100周年の佳節にある。党成立初期のリーダーには、陳独秀、李大釗、周恩来など日本留学経験者が多く、日本とのゆかりが深い。しかし、中国と日本は、不幸な戦争時期から新中国建国を経て、1972年に両国の国交が回復されまでの間、様々な分野での交流は現在ほど盛んではなかった。そのため、交流を物語る史料も少なく、私自身、近代・現代史についての著作があるが、まさに研究者・学者にとって、この時期の史料の復刻が待ち望まれていたと言えよう。1922～1968年にかけて、日本がアジア諸国と密接な関係でつながっていた時代を活写した『国際写真情報』は、近現代のアジア関係史を理解するうえで貴重な史料になりうると考える。そして、大正・戦前・戦中・戦後の国際関係・政治・社会・文化・芸術を伝えるグラフ誌として、『アサヒグラフ』との双璧をなす貴重な媒体の復刻、しかも電子書籍として紙面細部の拡大や検索機能により、新たな発見をもたらすかもしれない。

この度、『国際写真情報』復刻版が電子書籍として刊行されたことを、誠に喜ばしく思う。歴史文献はその劣化しやすい性質から、原本へのアクセスが難しく、研究者たちは復刻版に助けられてきたところがあった。コロナ禍においては、その復刻版でさえ閲覧に制限がかかっている現況である。こうしたなかでの電子版刊行は、ポストコロナまでも視野に入れた試みと言えよう。

日本工房の『NIPPON』が戦時中の時代背景を鮮明に映し出したとすれば、国際情報社のグラフ誌『国際写真情報』は戦後の様子まで現代の読者に紹介している。1922年から1968年にかけて刊行された『国際写真情報』は、戦前と戦中、戦後にいたる、近現代日本におけるきわめて重要な時期を取り扱っている。激動の時代を生き抜いた一般の人々の日常をとらえた文化や芸術の写真報は、それ自体とても貴重な歴史記録であると同時に、当時の日本が持っていた印刷産業の科学技術をも表している。

『国際写真情報』の特徴たる面は、その誌名が示すような国際性にある。同誌には、日本の国際関係や東アジア関係を取り扱った報道写真および記事が多く掲載されており、英語と日本語のバイリンガル・ニュースは明らかに海外の読者をまで意識していたと思われる。とりわけ日韓関係においては、韓国戦争の休戦協定、在日朝鮮人の北朝鮮送還、李承晩と朴正熙政権下の韓国情勢など、日韓外交正常化に至るまでの陣痛や両国間の緊迫した様子がリアルに浮き彫りになっている。

こうしたビジュアル資料が電子書籍化されたことによって、今後、より多くの研究者・社会人・学生の目に広く届いていくことができれば幸いである。